

28P-pm07S

緒方洪庵の薬箱(大阪大蔵)由来「葎根」「葎越」: 基原の史的深化と実地臨床
○上田 大貴¹, 高浦 佳代子^{1,2}, 高橋 京子^{1,2} (阪大院薬,²阪大博)

【背景・目的】幕末、適塾を主宰した蘭方医、緒方洪庵(：洪庵 1810-63 年)が実地臨床でそれぞれ壮年期・晩年期に使用したとされる2つの薬箱が現存する。生薬・製剤が収納され、洪庵の治療実践を知る貴重資料である。今回、2つの薬箱に存在する「葎根」「葎越」に着目し、基原の史的検証と治療実践について薬学的視点で解析した。【方法】2文字表記の薬名は洪庵の便宜上の表記と考えられることから、名称・基原種・性状等を、16世紀-20世紀初頭の日中本草書より悉皆調査した。治療実践は、前述の文献および洪庵刊行/関連の『扶氏経験遺訓』等を根拠とした。【結果・考察】文献検証において、内藤記念くすり博物館発行『薬物名出典総索引正編』に記載された閲覧可能な「葎」で始まる薬物名100件(39文献)のうち約90%が葎若及び関連処方だった。また、扶氏経験遺訓に記された「葎」で始まる生薬は葎若のみであったことから、「葎根」「葎越」の基原は葎若であると推察した。また、葎若の基原の記述を抽出したところ、『多識編』(1649)ではタバコが示されていたが『本草弁疑』(1681)以降では否定され、『物類品隲』(1763)以降はオメキグサ、ハシリドコロが基原として挙げられている。『遠西医方名物考』(1822)以降はペラドンナが記載されるようになり、ハシリドコロと併記されている文献も見られた。また、基原植物形態等の記述からヒヨスも基原として誤認されていた可能性を示した。薬用部位としては種子、葉、根が多く挙げられている。さらに、葎若の薬効および製剤に関する記述を調査したところ、製剤の原料としては一般的に葉が用いられていたことを明らかにした。扶氏経験遺訓では葎若の効果として鎮痙、麻酔、解凝が挙げられているが、散瞳薬としての効能記載は見られなかった。また、ヒヨスとの使い分けがなされており、洪庵は2者を区別して使用していたと推察した。